

学校評価における規模の影響に関する研究

— 公立小学校の卒業生を対象として —

A Study on the Causality Effect from Scale of School to Evaluation of School

— Questionnaire survey for elementary school graduates —

古田 肇 (Hajime Furuta) 指導：小島 隆矢

1. 背景と目的

近年の日本は少子高齢化に伴う人口の二極化が全国各地で見られ、小学校の規模の二極化も同時進行している。今後の人口変動や地域性などを考慮すると小規模校を廃校の対象にすべきかという議論は地域行政まで及んでいる。しかし、廃校の決定基準を覆す研究論文は非常に少ない。本研究では卒業生のふりかえり評価視点に着目し、よりよい教育環境を目指すために規模が影響を及ぼす学校価値や学校評価構造の科学的知見を得ることを目的とする。

2. 調査概要

2.1 インターネットによるアンケート調査

予備調査として、全国に居住する18歳～45歳を対象とし、転校経験のない公立小学校の卒業生のうち、当時の1学年あたりの学級数を1クラス(10人未満)、1クラス(10人～40人程度)、2クラス、3～5クラス、6クラス以上の5分類に層化し無作為抽出により本調査の対象者を選定し本調査では、557名に発信、有効回答339名のうち、317名分のデータを回収した。

2.2 インタビュー調査

小規模校の卒業生(20代：4名・50代：3名)を対象に学校規模×年代(若年層・高齢層)の卒業生の小学校に対

する評価項目に着目し、インタビュー調査を行った。

3. 分析方法

3.1 インタビュー結果のKJ法的分類

調査で得られたデータを各対象者の回答ごとのKJ法的図解化したネットワーク図を作成し、学校規模×年代の小学校の魅力点・不満点の整理を行った。

3.2 自由記述式設問の対応分析

アンケート調査で得られた自由記述回答を学校規模別に対応分析を行い、規模別の魅力・不満のカテゴリー分類、評価の階層化を行った。

3.3 アンケート調査データの統計的因果分析

学校規模と小学校における総合的満足度・意向の関係を検討することを目的として、統計的因果分析を行った。

4. 結論

過小規模校の総合満足度が最も高い結果となった。以下の因果モデルよりその大きな要因効果として「異学年交流」が挙げられた。人間関係の充実が学校評価に影響を与えていた因果関係など、規模による学校評価構造について、より精緻化した科学的知見を得ることができたといえる。今後の課題として学校への愛着が地域愛着につながり、地域意向を変えするという構造モデルが検討課題となるだろう。

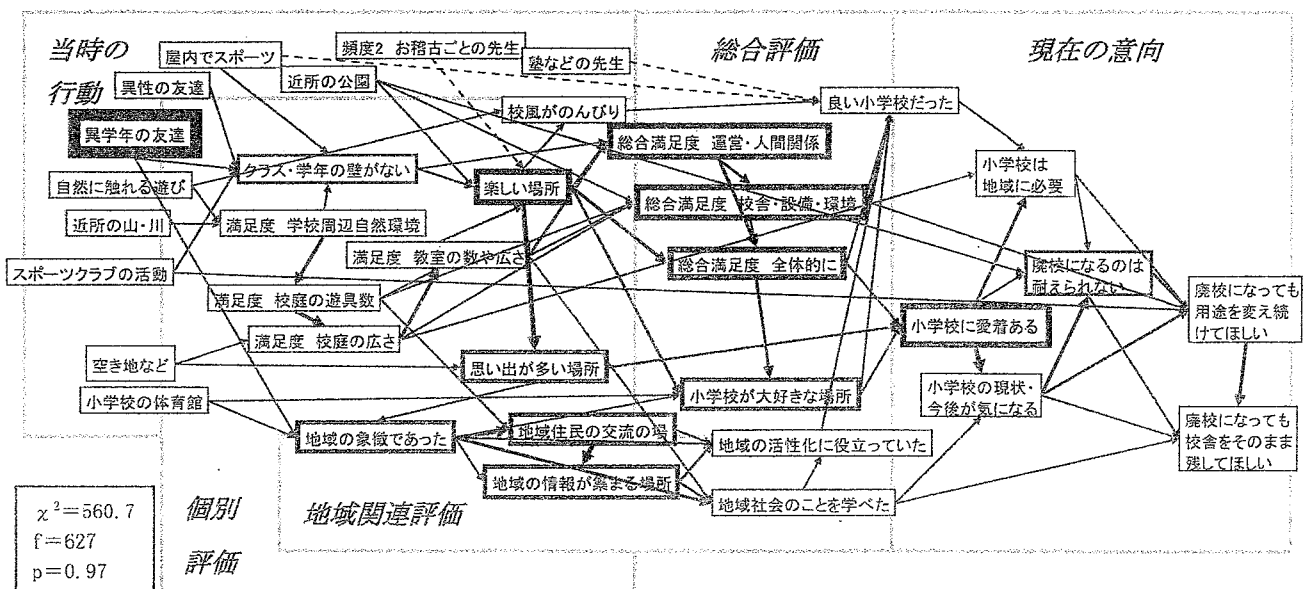


図1 因果モデル

* 矢線の太さはパス係数(非標準解)に比例, 点線は負のパス係数